

## 【特別寄稿】

### 映画「マイペース マイスペース～ひきこもりソーシャルワーク」 上映会の成功をめざして

2026 年 10 月 3 日・4 日に開催される全障研道支部第 47 回支部学習会の一環として、10 月 3 日(土)にドキュメンタリー映画「マイペース マイスペース～ひきこもりソーシャルワーク」の上映会がもたれます。これに先立って、長年にわたってひきこもり支援に携わっている田中敦さんに本作のもつ意味について執筆していただきました。

---

#### ここには“ひきこもり”と支援のあり方を知る手がかりがある

特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

田中 敦

ひきこもりは今や全国に推計値で 146 万人、北海道内だけでも 5.5 万人いると言われる社会問題である。ひきこもりを語るとき、一般的には他者との交流や関係性でとらえられることが多い。しかし、ひきこもり当事者の多くは「こんな無様な自分を世間に知られること」に恐れを抱き、「誰かに迷惑をかけているのではないか」「誰も傷つけない」と「ひきこもる」のである。こうした「自分と自分との関係性」に苦しんでいる当事者が、「過去を否定せず」こんな自分でもよいと受け入れられるようになるためには、それ相応の時間やそのように感じ取れる似たような経験をもつ人や理解者たちとの交流が欠かせない。緩やかに流れる時空間と共に自分を少しずつ取り戻してくプロセスを保障するその場が「居場所」ということになる。

古くから文化と歴史の街と知られる、和歌山県紀の川市にある、社会福祉法人麦の郷が運営する「創カフェ～hajime～」もまたその一つであるといえよう。築 100 年以上の古民家山崎邸を借用改装し、2013 年から運営している。呼称 Hajime は「HeArt Join Move」ここをつなげて動き出すという由来から来ている。

ドキュメンタリー映画「マイペース マイスペース～ひきこもりソーシャルワーク」は、このカフェを開設に至った経緯を次のエピソードから説明している。「ある日映画が面白そうだからみんなで見にいこうという話となった。しかし当日集まる時間になってもだれも来なかった。『やっぱり今日はやめておきます』という連絡だけ入った。どうして来なかったのか、あるメンバーから後で「僕たちは息をしているだけでも周りに迷惑をかけている。遊びに行くからお金がほしいなんて口が裂けても家族には言えない」「ひきこもっている自分はお金を稼いでいないから、映画を見たかったけど、テレビ放映されるまで我慢した」と胸の内を語るのだ。これがきっかけとなり、気兼ねなくお金をみんなで創り出そうとなり、考えた末に珈琲の焙煎作業に至り、やがて現在の創カフェをつくる原型になった。

社会福祉法人麦の郷の山本耕平理事長は、著書『ひきこもりソーシャルワーク 生きる場と関係の創出』（かもがわ出版）の中で、創カフェは、当事者とソーシャルワーカーすべてを「カフェスタッフ」と呼び、「カフェスタッフ」が全員参加して、メニューを決め、店内

の装飾を決定し、その日のおすすめを協議する。調理を担当する者、珈琲を入れる者、注文を取り配膳するフロアー係も、そのスタッフ会議で決定する。カフェでの売り上げは、彼らの労働時間との関係で計算され、彼らの収入に反映させる、と述べている。それは「強制されない」「決めつけない」ことを大切にして「協同」でカフェをつくっていくというスタンスであり、「居場所の延長線」「働くという居場所」という、中間労働の役割を担う居場所である。

こうした協同的關係性は、ひきこもりソーシャルワーカーとしての個別相談場面でも見られる。まだ集団が苦手という F さん(34 歳)との面談日。シール貼りの作業をしながら対話するシーンが映し出される。そこには支援—被支援との関係を超えた協同的關係性がある。

山本耕平理事長は、「当事者と支援者との関わり方」について、「私は難病で杖を突いて車椅子まで歩く。このとき私は被支援者である。支援者から私の言うことを聞きなさいと言われると、ものすごく腹が立つことがある。当事者と支援者はお互い葛藤しつつも議論し合いながら人生をつくるのが大切」と語っている。

この映画の後半は、新たな職員の入退職や創カフェから一步踏み出す仲間が映し出されている。創カフェをきっかけに新たな道を踏み出すきっかけとなっているのも「居場所」である。イタリア料理店で現在働く当事者は、創カフェの前身の不登校の居場所からのつながりがある人だった。そこで野中康寛センター長と出会ったことがきっかけで、その後高校に進学。調理専門学校を経てホテルのレストランに就職したが、労働現場は過酷で心身共に追い詰められリストカットや無気力状態で実家に戻りひきこもり続けていた。治療を経て向かった先は中学時代安心して過ごすことができた「居場所」で、野中さんの元へ。

「久しぶりに顔を見れば」という感覚で再度訪ねたが「昔のように接してくれたことがとても嬉しかった」という。「居場所」には卒業はなく、「いつでも戻って帰って来てもよい場」なのだというのを物語るエピソードだ。

メンバーの中には、新たな挑戦を試みる当事者もいる。初めて個展を開くという K さん。中学 2 年からずっと止まったままだった。初めて働くことで自信をもつようになり、出会いがあり結婚、一般社会に入る。しかし馴染めず仕事も辞め、離婚も経験した。「絵画を見てもらうことで唯一の社会参加」「アートは言葉以上に強く伝えることができる」と述べている。トラウマを環状島(かんじょうとう)モデルで分かりやすく解説した宮地尚子『トラウマ』(岩波新書)でも、心に傷を負った当事者の声なき声を聞き取る方法として文化的な活動やアートの可能性を指摘している。

このような創カフェは、これまで順調にきたというわけではない、映像では触れられていないが、山本耕平理事長の前掲書の中で居場所において、「収入(工賃)が生じているから居場所ではないと、自治体が補助を打ち切った現象があった」ことを明かしている。居場所活動を長く続けていると、そこから派生する様々な生き方や、働く道筋が生まれてもおかしくない。こうした「実情」を認めず、お役所的な線引きが結果的にひきこもり支援を

遅らせてきたことを教訓にする必要がある。

この映画の中の一つひとつの言葉にハッとさせられることもあるだろう。受け取り方も多様だろう。ただ、多くの人たちにひきこもりとは何か、支援とは何なのかを知る手がかりを与えてくれるはずだ。10月3日(土)の上映会にご来場いただくことを切に願うものである。

---

## 【本作のあらすじ】

開設してから10年を超えた古民家カフェ(創 HAJIME—CAFÉ)は、毎週の木・金・土曜に営業——そこで働くメンバーは、厨房での仕込みや調理、配膳の接客など、運営を手分けして行なっています。それ以外の時には、「学び」や「遊び」の取組みを行ない、ゲームやキャンプ、「しゃべくろ会」、女子会などの交流も…。夏まつりへの出店参加、年末の餅つき大会などで地域との交流もやっています。

一方、スタッフはカフェ運営と並行して、困難を抱える当事者や家族の相談にも対応し、学校・医療・行政・関係機関などと連携して、情報の発信・提供も進めています。

古民家という独特な環境——ゆっくりとした時間が流れ、ホッとひと息つける「居場所」で、メンバーは自分のペースで様々な活動に参加し、協同の取組みのプロセスを通して、お互いの違いや共通点を見つけ、自身を見つめ直す機会を得ているのです。

### ●と き:2026年10月3日(土)

①10:30~11:30 トーク 11:30~12:00(田中敦・中橋真紀人・二通諭)

②13:00~14:00 トーク 14:00~14:30(高井賢二・中橋・二通)

③15:30~16:30 トーク 16:30~17:00(大橋伸和・中橋・二通)

④18:00~19:00 トーク 19:00~19:30(中橋・二通)

### ●ところ:札幌市教育文化会館4階講堂(札幌市中央区北1条西13丁目)

中央バス・JRバス「北1条西12丁目」停留所すぐ

前売・予約:1000円 当日:1300円 全障研・映サ会員・障害者・学生:800円

※満席の場合は当日券を販売しません。

前売券・予約は、二通諭へ!(全障研会員価格で販売します)

Eメール:nitsu@mvg.biglobe.ne.jp

携帯電話:090-2697-0496(ショートメール可)

主催:札幌映画サークル 共催:全国障害問題研究会北海道支部 後援:札幌市

協賛:焼鳥じゃんぼ 札幌市中央区南5条西4丁目(中小路東向き) 電話011-531-6451